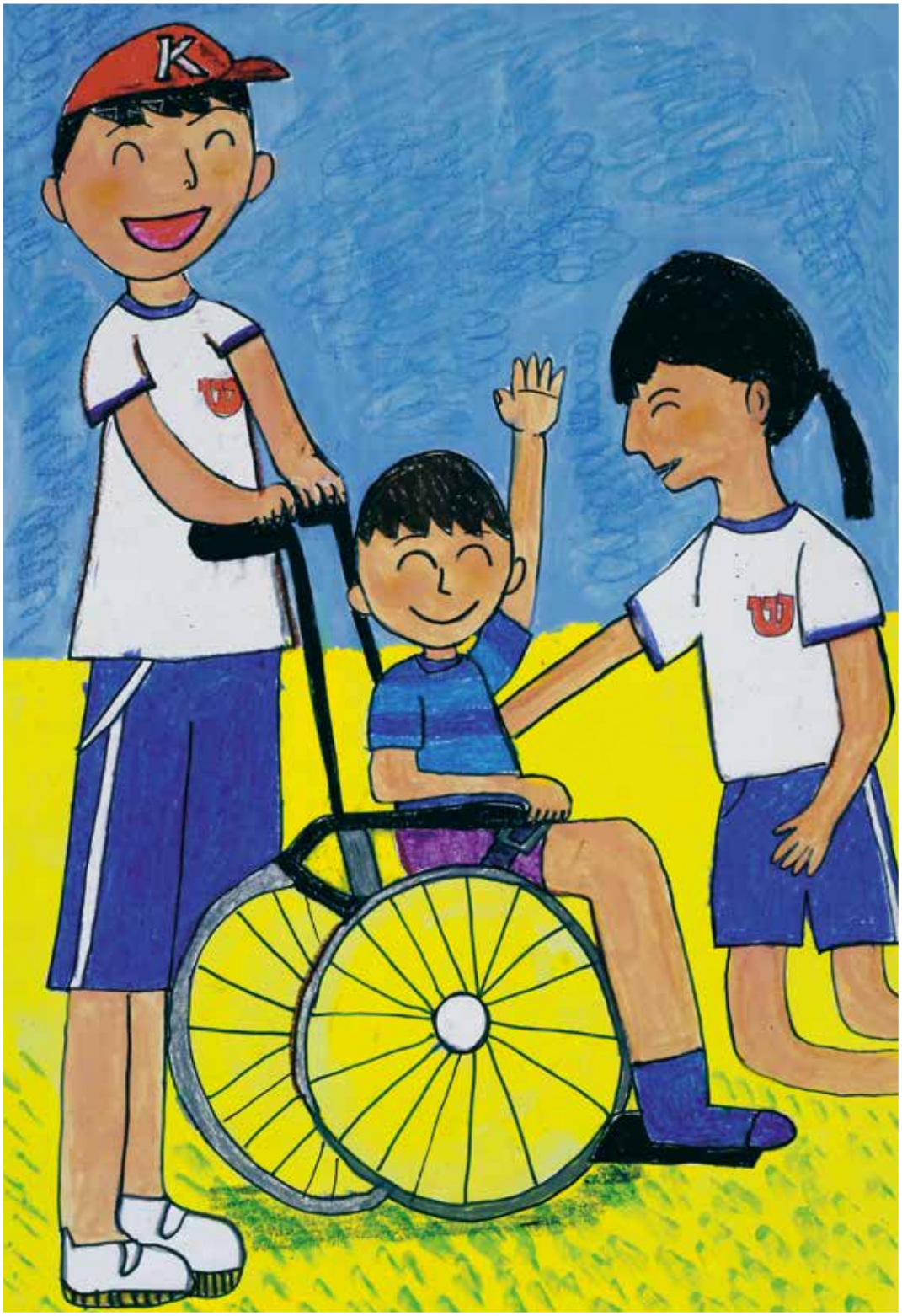
心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

2018

優秀作品集

小学生部門

香川県知事賞



三木町立田中小学校　五年

高橋（たかはし）　千裕（ちひろ）

香川県

小学生部門 香川県知事賞

聞いてくれてありがとう

丸亀市立飯山北小学校　五年　高砂（たかさご）　結心（ゆうしん）

ぼくは、ねんまく下口がいれつです。口の中のきん肉がわれていて話すのが無理だったので、二さい半で手術をしました。少しずつ話せるようになったそうです。今でも構音障害があるので、半年に一回の通院と月一回リハビリへ行っています。通院では、鼻からカメラの管を入れてきん肉の動きを確にんしたり、鼻の空気もれがどれだけあるかチェックしたりします。管を入れたまま話すので今でも苦手です。リハビリでは、口の中に十秒ぐらい空気をためてからロウソクの火を消したり、べろの動きを練習したりしています。最初は、口の中いっぱいに空気をためる事が苦手で鼻から空気がもれたりしていました。口の中にためたり、出したりするのがとてもむずかしかったのを思い出します。ぼくは今でも、ぱぴぷぺぽ、さしすせそ、たちつてとの発音が苦手です。

三年生の時に学校の帰り道、

「どうしてそんなしゃべり方なん？」

と、友達がぼくに聞いてくれました。ぼくは小さいころに、口の中の手術をした事を伝えました。早口だとか分かりにくいけん、もう少しゆっくり話したほうがいいと友達が教えてくれました。ぼくは、ゆっくり話すと友達が分かりやすいんだと、気がつきました。だけどぼくは、言いたい事や話したい事があると早口になってしまいます。ゆっくり話してよと、家族に言われます。友達から、先生にはもっとゆっくり話さんと分からんよと、言われます。言われた時はゆっくり話そうと思っているけど、いつの間にか忘れて早口になってしまいます。

ぼくが一番気をつけたい事は、みんなに言いたい事が分かってもらえるように、ゆっくり話す事と、言葉をしっかり考えてから話す事です。みんなに分かってもらえるように、これからもリハビリを、一生けん命に頑張りたいと思います。障害の事を聞いて教えてくれた友達をぼくは大切にしたいと思います。

中学生部門 香川県知事賞

「平等な社会のために僕ができること」

高松市立山田中学校　三年　林（はやし）　孝晃（たかあき）

僕は、この一年で新しい友達ができました。八歳と四歳の男の子です。去年の秋祭りで同じ自治会のメンバーとして一緒に踊りに参加したことが出会いでした。その二人と普段一緒にサッカーや野球などをして遊びます。歳のはなれた本当に小さい小さい友達です。そのかわいい姿に、僕はいつもいやされています。

その二人の友達のご両親は、耳が不自由な方々です。特にお父さんの方は、話す言葉が明瞭でないため、初めコミュニケーションが難しいと思っていました。しかし、その友達と聴覚障害のあるお父さんとで一緒に遊んでいるうちにそのお父さんの言いたいことがなんとなく分かるようになりました。そのお父さんは、学生の頃野球部だったこと、バイクが好きでバイクの免許をとろうとしていること、プラモデル作りも好きなことなど知ることができました。自分の父とは違って、スポーツができて手先が器用な方でした。僕の父はなかなか一緒にスポーツをしてくれませんが、そのお父さんは僕たちと共にスポーツをしてくれて僕は、楽しい時間を過ごすことができています。僕の身近で大切な、大人の一人になりました。

そのご家族は、僕の家の裏に住んでいます。とても近くに住んでいました。なのに、こんなに親しくなれたのは、最近その家族が僕たちの自治会に入って地域の行事に参加したからです。母から、自治会の会には、耳の不自由でないおばあさんと一緒に出席していると聞きました。それを聞いて僕は、耳に障害のある人が地域の自治会に入り活動することは、とても勇気がいる事だろうと思うし、様々な場面で苦労があるのだなぁと思いました。

もし、自分が耳が不自由だとしたら、普段あたり前にしている授業を受けること、部活動をし大会に出場すること、音楽を聞いて楽しむことなど難しい事だらけになると思いました。

日本では、憲法十三条に「生命、自由及び幸福追求に対する権利」が記されています。これは、どんな人も、生まれながらに個人の平等と尊厳を守らなければならないということを基本にしています。この「人権尊重」は人間にとって実は、歴史の浅いものだそうです。例えば、アメリカ合衆国で、黒人の「公民権」が考えられたのは、一九六八年、日本の女性の「参政権」が認められたのは、一九四六年とまだ、百年もたっていません。

僕たちが、その浅い歴史の人権が尊重された社会をより強固なものとし、守らなければならないと思いました。それには、僕は、どんなことをすればよいのでしょうか。

まず、僕ができることは、どんな障害があっても相手を理解しようとすることだと思います。相手がどんな考え方でどんな特性をもっているか知ることがその人を尊重する上でまずしなければいけないと考えるからです。

次に、障害者に優しい環境を作りたいと思いました。その聴覚障害があるお父さんの家は、インターホンが鳴るとランプが家の中でついて知らせる工夫がされています。どのように環境を整えると障害があることで不自由な点が改善されるかを考え実現に向けて僕はどんな事ができるかを考えたいと思いました。

さらに、コミュニケーションを通じてサポートしたいと思いました。環境の改善には、時間、お金がかかる場合があります。細やかな対応がすぐできるように自分自身がツールになるのです。その聴覚障害のある家族が地域の行事へ参加できるようにサポートをしていた近所の方々を参考にしたいと思いました。

僕は、今後も、どんな障害があっても一人一人が尊重される社会になるように自分は何ができるかを考えていきたいと思います。

小学生部門
香川県健康福祉部長賞

なんちょうのおねえちゃん

丸亀市立飯山北小学校　一年
山口（やまぐち）　李人（いっと）

ぼくには、一つうえのおねえちゃんがいます。けんかをするときもあるけど、おもしろくてやさしいおねえちゃんです。ぼくのおねえちゃんは、みみがあまりきこえません。なんちょうというそうです。ほちょうきというものをつけています。これをつけるとすこしきこえるようになるらしいです。まいあさほちょうきをみみにつけてとうこうしています。あめにぬれると、こわれてしまうらしく、だいじにしています。

あるひ、としうえのしらないおにいちゃんが、ぼくのおねえちゃんにむかって、

「みみきこえんのやろ。それほちょうきか。へんなの。」

といってきました。

そのとき、おねえちゃんをみると、すこしかなしそうなかおをしていました。ぼくは、ただみているだけでした。

ぼくは、ほちょうきをしっているし、みみがきこえにくいのもなんともおもわないけど、ほかのおともだちは、そうじゃないのかな、とおもいました。

そのひのよる、おかあさんにはなすと、すぐにおねえちゃんにはなしをききにいき、ぎゅっとだきしめていました。おかあさんも、おねえちゃんもつらいきもちだったのだとおもいました。ぼくもかなしくなりました。

みみがきこえないって、どんなかんじだろうとおもって、みみをふさいでそとにでてみると、とてもこわかったです。おとがきこえにくいから、ほちょうきをすること、ものがみえにくいから、めがねをすることは、あたりまえのことだとわかりました。

それをちくちくことばをつかって、ともだちをかなしいきもちにさせるのはわるいことです。ぼくはかなしいきもちにならないように、こえにだしておねえちゃんをまもります。

小学生部門
香川県健康福祉部長賞

だいすきなこだまがくえん

丸亀市立飯山北小学校　一年
瀬尾（せお）　來夢（らいむ）

ぼくは、うまれたときからみんなよりすこしみみがきこえません。そんなぼくをしんぱいして、おかあさんはぼくにいろんなことをしてくれました。ことばのりはびり。いっしょうけんめい、びょういんにかよいました。

4さいになってから、ぼくはほちょうきをつけることになりました。そして、ぼくはおかあさんとはじめてこだまがくえんにいきました。こだまがくえんには、ぼくとおなじように、ほちょうきをつけたともだちがたくさんいました。こだまがくえんには、せんせいがたくさんいて、ぼくにたくさんのことをおしえてくれました。はずかしがりやのぼくは、なかなか、ともだちとおはなしができませんでした。でも、いつもせんせいがちかくにいてぼくといっしょにともだちにはなしかけてくれました。はろうぃんには、かそうしておみせをまわったり、くりすますには、みんなでくりすますぱあてぃいをしました。こだまがくえんには、たくさんのおもいでがあります。こだまがくえんですごしたじかんは、みじかかったけど、ぼくはこだまがくえんがだいすきです。

1ねんせいになったぼくは、1ねん1くみで、たくさんのともだちといっしょにべんきょうをしています。やっぱり、ともだちにはなしかけるのは、すこしむずかしいけれど、みんなぼくに、やさしくしてくれます。ぼくもともだちにやさしくしてあげたいです。うまくことばでは、いえないかもしれないけれど、つたわったらいいなあとおもいます。こだまがくえんでおしえてもらったことをおもいだして、これからもともだちをだいじにしたいです。みんなといっしょに、たのしくしょうがっこうですごせたらいいなあとおもいます。

中学生部門 香川県健康福祉部長賞

アイルコートに行ってみて

高松市立山田中学校　一年　久保（くぼ）　夢寿（ゆず）

私は、フラダンスのい問でアイルコートという障害者のしせつに行きました。始め行くと聞いた時に、いつも行っている老人ホームとはちがいどんなところか興味を持ち調べてみました。アイルコートでは、障害をもつ人の自立に向けた活動や支えんを行っているそうです。入り口を入る前までは、どう接してよいのか不安でした。

しかし、しせつに入ると「こんにちは。お願いします。」など明るくあいさつをしてくれました。老人ホームとは少しちがい、元気でにぎやかでひかえ室まで、のぞきにくるこもいました。気づけば、始めの不安はどこかにとんでいっていました。

二・三十人の子供から大人の方まで笑顔で迎えてくれました。みんな何にでも興味をもってくれました。

みんなが楽しめるように、なるべく笑顔でおどれるようにがんばりました。でも、おどっている時に高校生ぐらいの男の子が、じっと真顔で見ていたため少し怖かったです。私のおどりがよくなくて、そんな顔になっているのかと思い不安になることもありました。

途中「ハメハメハ大王」という曲をしせつの利用者さんと一緒に歌ったり、おどったりしました。この曲をする時に、「レイ」という首かざりと頭につける花をかしてあげました。その時に、女の人は自主的に喜んでとり、身につけてくれました。男の人もはずかしがりながらも「レイ」や「花」をつけてくれました。そのうれしそうな顔が忘れられません。みんな、フラダンスが上手・下手ではなく、音楽が流れておどる楽しい雰囲気を感じてとても楽しんでくれてよかったです。

家に帰り母とい問についてふり返りました。初めて大勢の障害のある人たちとふれ合い、接し方の難しさや怖さがありました。あの真顔で見ていた人のことも考えてみました。

私のことを、きらいで見ているのではなくそれがその人の個性である、歌が好きな子・おどりが好きな子・歩くのが好きな子・光る物が好きな子など自分自身がまだ障害者に対して理解が十分できていないからだと感じました。

障害には見ためで分かる子と分からない子など様々な種類があり、一人一人支えんの仕方が異なっていました。私の家のとなりにも障害を持つ四十代の男の人が住んでいます。毎日夕方になると犬の散歩をして、目が合うとじっと見てきます。「こんばんは。」とあいさつするとうれしそうに笑顔で応えてくれます。他にも兄の同級生にダウン症の子がいて、小学校のころかかわることが多くありました。こう考えるといつの間にか障害のある人たちとかかわる生活をしてきたんだなと思いました。そのころは、障害がある・ないでかかわるのではなく一人の人として接してきました。しかし、自分が成長することで見た目がちがうなど知識が不十分のまま、障害という言葉ばかりが一人歩きしていたように思えました。

この、アイルコートでのい問を通してあらためて障害の方々とふれ合うことができ障害について考えることができました。障害があるから・ないからと区別せずに接していけるよう、もっと理解を深めこれからも、フラダンスで様々なしせつにい問へいかせてもらいふれ合いを大切にしていきたいと思いました。

中学生部門 香川県健康福祉部長賞

げんちゃんありがとう

高松市立山田中学校　一年　安部（あべ）　美咲（みさき）

「今日、げんちゃんを見かけて手を振ったら気付いて手を振り返してくれたわ。卒業式からまた背も伸びた感じだったよ。」と母が私に言ってきました。元気でいるかなと思いながら、げんちゃんの満面な笑顔の姿が脳裏に浮かびました。

げんちゃんは現在、別の学校に通っていて小学校の卒業式以来会っていません。彼には生まれつきの障害があり、養護学校へ通っているからです。彼と初めて会ったのは、私が年長時に別の保育所から校区内の保育所へ変わった時でした。話しかけられても何を言っているのかが解らなくて、なぜこの子はきちんと言葉が話せないのだろうと思ったことをはっきりと覚えています。鼻水が垂れているのに彼が気付いていない様子だったので拭いてあげたり、何か手伝ってあげたりすることが自分にできる優しさだと思っていました。

ある日、げんちゃんが私の手のひらをトントンと叩き何か話しかけてきました。何が言いたいのか分からないからと、考えることもせずに私は慌てて

「先生、げんちゃん何か言っているよ。」

と先生を呼んで済ませてしまいました。「げんちゃんに話しかけられる」＝「先生を呼ぶ」が当たり前になっていたのです。

しばらくしてからのこと、塾へ通うことになり行ってみると、その教室にげんちゃんも通っていました。みんなで帰りの支度をしていると、私の方を向いて彼が話しかけてきたのです。私は聞こえないふりをして誤摩化そうとしていると彼のお母さんが「○○○って言いよるよ。」と教えてくれたのですが、私は彼の言葉を理解していることがとても不思議でした。帰りの車の中で、

「げんちゃんが言っていること、お母さんは、分かっているのかな？」

と母に尋ねると、

「何を言っているのか分からないのは、何が伝えたいのかを本人の気持ちになって考えていないからじゃないかな。げんちゃんは、いつも相手の表情を見て、相手がどんな気持ちでいるか見ているよ。」

と言われました。彼を気にして見ていると、確かに彼は相手の表情を伺っています。自分が伝えたいことを相手は理解しているかを表情で確認しているのだと感じました。それからの私は、彼に話しかけられた時は誰かに頼らず、彼の表情やジェスチャーなどから伝えたいことを理解するように努め、

「今、○○○って言ったの？」

と彼がうなずくまで聞き返し、こちらからも話しかけて交流を続けました。

小五の暑い時期でした。廊下で友達と話をしながら歩いていると、

「あ・べ…」

とげんちゃんが初めて私の苗字を呼びました。学校での彼は誰かを呼ぶ時は、相手の肩や手のひらを軽く叩いて気付いてもらうのが当たり前で、名前を呼ぶことが無かったので自分を含め周りにいた友だちや先生も驚いていました。彼が名前を覚え、呼んでくれたと考えると私にとっては大切な思い出です。

彼は、発達が人よりのんびりしているだけでとても頑張り屋です。塾で持ち帰る宿題は必ず済ませて持ってくるし、徒競走では遅くても最後まで走り抜きます。そして彼の一番の良いところは、誰にでもきちんと挨拶や感謝の言葉が言えるところです。当たり前のことができていない自分が恥ずかしいと感じるぐらいです。私は「体育が苦手」というように、「○○が苦手だ」というだけで障害のある人にも素敵なところがたくさんあるということにみんなが気付いてもらえればと思います。偏見を無くし、彼を含めた障害のある人やその家族が暮らしやすい社会になればと心から願います。

げんちゃん、またいろんな話しようね。

小学生部門 審査員特別賞

高齢者福祉施設に行き感じたこと

三木町立氷上小学校　五年　山田（やまだ）　聖仁（まさひと）

ぼくは、夏休み前にクラス全員で地元の高齢者福祉施設に見学に行きました。

「どんなところだろう。」

「そこで、お年よりの人は何をして、いるだろう。」

と楽しみと不安な気持ちで行きました。

施設に行ってみると、たくさんの高齢者や車いすに乗った人、つえをついた人達がくらしていました。

それから、施設の方が案内してくれました。廊下やトイレにも手すりがあり、トイレは車いすの人でも入れるように広いトイレもありました。お風呂にも手すりがあり、家のお風呂とはちがっていました。ねたままで、入れるお風呂もありました。ぼくは、こんな設備があることにびっくりしました。また、家族とはなれ、ここでくらしていて楽しいのかなと思いました。

施設見学中、くらしている人達の様子を見ていると、お年よりの方ができないことは職員さんが手助けしてあげていました。一人で立つことができない人には、立てるように支えてあげていました。また、車いすを自分で動かせない人には押してあげていました。生活して、困ることを手助けして、当たり前の生活が普通にできるようにしてあげていました。その手助けしている職員さん達はすごいなあと思いました。また、楽しみの一つで押し花を作っていてきれいに作れてお年よりの方も楽しそうでした。

家に帰って母に施設見学をした事を話しました。

「お年よりの人は家族の人とはなされてさみしくないのかな。」

と質問すると、

「さみしいとは思うけど、家族面会もあるし、施設の中にも友達もいるし施設訪問でたくさんの子ども達が来てくれるなど楽しいこともたくさんあると思うよ。」

と言っていました。それを聞いて少し安心しました。

これからも施設でくらす人達が楽しく笑顔でくらせるように、ぼくにできる事があれば、してあげたいと思いました。

また施設訪問して、リコーダー演奏などで喜んでもらいたいと思います。

中学生部門 審査員特別賞

心と心をつなぐ

高松市立山田中学校　二年　利國（としくに）　桜文（さや）

　これは友達から聞いた話です。ある中学校の吹奏楽部に、パーカッションをしている自閉症の女の子がいました。ある日、パートごとにそれぞれの教室で練習をしていたのですが、その子は理解するのに時間がかかり、パートの練習に遅れがあったので、同じパートの子二人が教えてあげていました。そこへ副顧問の先生が通りかかり、

「何しゃべっりょんな。黙って練習せんか。」

と言われたそうです。その先生は、その女の子に教えてあげていることを知らず、みんなで話していると勘違いしたのです。教えていた子は、その後、説明できずに泣いてしまったそうです。この話を聞いて、私は外見だけではわからない障害がある人が近くにいた場合、周りの人がその人のことに気づいたり、理解したりして、その人に伝わりやすい伝え方をすることが大切だと思いました。また、教えていた子は先生に話をしていた理由を説明して、先生はその話に耳を傾けるべきだったと思いました。

　私が小学生の頃、二歳年上の私の兄と同じクラスに自閉症の男の子がいました。私が通っていた小学校は人数が少なく一学年一クラスしかなかったので、六年間ずっと同じクラスでした。だから、みんな仲が良くのんびりとした学校でした。学年を超えた交流があったので、その男の子もみんなと馴染んでいて、私も何度か話したことがあります。彼は話をするのが好きだったようで、いろんな人に自分から話しかけていました。話しかけられた人は自然に応えていました。昼休み、私が友達と彼がいつも勉強している教室で遊んでいると、彼が来て、

「僕ね、〜で〜が当たったんだ。」

と私に話しかけてきました。私はそのゲームの話がわからなかったのですが、

「そうなんだ。」

と応えました。彼は、それからもずっとゲームの話をしていました。私はその話を、「ゲームが好きなんだな。」と思いながら聞いていました。私は、彼の話を最後まで聞いて、彼の好きなことや伝えたいことを理解することが大切だと思いました。

　今、テレビで「グッド・ドクター」というドラマが放映されています。主人公は小児外科医を目指して研修しているサヴァン症候群の男性です。サヴァン症候群とは、コミュニケーション障害や認知障害のある自閉症スペクトラムの人のうち、ごく特定の分野に限って優れた能力を発揮する人の症状を指します。この主人公も医者としての知識は優れていますが、患者のためを思ってしたことが保護者に誤解されることが多く、周りの医者からも「君には医者は無理だ。」と言われることがありました。でも、ある一人の医者がその男性の話をよく聞き理解することで、本当は患者にとってとても大切なことをしたということがわかります。そして、患者も喜び、最終的には保護者も感謝することになるのです。私はこのドラマを見て、誰か一人でも、男性の話を聞いた医者のように、その人を理解しようと寄り添う人がいれば、医者としての知識を最大限に活かし、活躍できると思いました。

　私は、この三つの体験を通して、障害にはいろいろな種類があり、目に見える障害があれば、目に見えない障害もあることを知りました。目に見えない障害がある人は、もしかしたら私たちの知らないところで困っているかもしれません。そして、自分の気持ちをうまく伝えられず苦しんでいるかもしれません。私は、まずその人に気づき、話を聞いて寄り添うことが大切だと思いました。その人の意思を尊重し、周りの人に伝わるように手助けできるようになりたいと思います。

2018
優秀作品集

中学生部門
香川県知事賞

高松市立香川第一中学校　三年

前田（まえだ）　祥輝（よしき）

2018
優秀作品集

小学生部門
香川県健康福祉部長賞

丸亀市立飯山北小学校　五年

小林（こばやし）　愛（あい）

2018
優秀作品集

小学生部門
香川県健康福祉部長賞

三木町立平井小学校　六年

植村（うえむら）　友貴（ゆき）

2018
優秀作品集

中学生部門
香川県健康福祉部長賞

丸亀市立東中学校　一年

西山（にしやま）　優奈（ゆな）

2018
優秀作品集

中学生部門

香川県健康福祉部長賞

観音寺市立観音寺中学校　三年

白川（しらかわ）　万結（まゆ）

小学生部門
審査員特別賞

観音寺市立観音寺小学校
三年　大西（おおにし）　翔陽（しょうよう）

中学生部門
審査員特別賞

観音寺市立観音寺中学校
三年　矢野（やの）　真尋（まひろ）

心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

2018

優秀作品集

香川県 健康福祉部 障害福祉課

〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1番10号

平成30年度人権啓発活動地方委託事業（法務省）

平成30年11月発行